響け古墳太鼓

江釣子の6区で4年がかり

おらが芸能さっそうと

22日に初披露

青年たち、みっちりけいこ

江釣子村第六区（五条丸、本宿）の創作芸能「古墳太鼓」が完成し十八日夜、村史跡センターで青年たちが地区民にお披露目した。地域の芸能をつくろうという話が出てから四年余り。青年たちがみっちりけいこを積んできた。完成が待たれていただけに、地元民は〝オラが芸能〟の誕生を祝福すると同時に、意欲的に継承していくことを誓った。古墳太鼓は二十二日の古墳まつり前夜祭で披露される。

六区には五条丸、猫谷地といった古墳群がある。この地区で「地域独自の芸能をつくろう」という話が出たのは昭和六十年四月。というのも、村内に数多くの芸能があるのに、同地区にだけなかったためだった。六区公民館（高橋直一館長）事業として芸能づくりがスタート。古墳地帯に位置することから「古墳太鼓」と名付けた。太鼓を購入、衣装も作り、青年たちが打ち手となり基本練習を続けてきた。

太鼓の打ち手は男七人、女三人の計十人。年齢は二十三～四十二歳。会社員、消防士、整骨士、大工、主婦など仕事もさまざま。

指導してきた宮城教育大学講師の佐藤正信さん(四六)が昨年十二月に基調曲を作曲。青年たちがこれをマスターし、この日のお披露目となった。

古代人の衣装をアレンジしたユニホームを身に着けた青年たちが「ドドーン」と太鼓を打ち鳴らした。「眠っている先人の祈り」をテーマにした基調曲は、太鼓の音で「火」と「水」を表現。時に荒々しく、時に静かに響き渡った。青年たちは汗びっしょり。力の入った発表に会場に足を運んだ地区民は大きな拍手を送った。「静と動の音がうまくかみ合った曲で、いかにも古墳太鼓らしい」「合格点」などと地区民。地域全体で取り組んできただけに、オラが芸能の誕生の喜びもひとしお。

青年たちは古墳太鼓を二十二日の古墳まつり前夜祭で一般公開、二十三日のまつりの芸能発表会でも発表することになっており、まつりを彩ることになりそう。数ある芸能が保存されている同村でも太鼓をメーンにした芸能は古墳太鼓だけ。同地区では完成を機会に今後、若手の育成に努め、〝古墳の里〟の芸能として保存継承活動に努める。中学生にも指導し、来年の江釣子中学校芸能発表会での披露を目指す。

威勢よく創作芸能「古墳太鼓」を発表する江釣子村第六区の青年たち。地区民は大きな拍手を送った